

# 後漢時代の墓券に関する一考察

—特に墓券の分類について—

江 優 子

## 〔抄 録〕

墓券とは、墓地を購入したことを記した副葬品である。本稿では後漢時代の墓券について、研究の沿革と問題点について論じ、これまでなされてきた墓券の分類を参考に、新たな分類を試みる。すなわち、現実の土地売買を模倣し、極めて簡潔な形式を具えるI-a類型、購入した土地に元来埋葬されていた死体はみな被葬者である買い主の奴隷となる旨を具えるI-b類型、土地売買の要素も含

むものの、地下冥界に対して申告する移文の形式を採るII類型に分類し、さらに結語及び墓券の形状形質、また出土地域を加えて考察した。

キーワード 墓券、買地券、鎮墓券

## はじめに

南宋末から元初における民間の雑事を記録した周密撰『癸辛雜識』別集巻下によれば、当時、墓を造るときには必ず買地券を用いたという。それは梓木に「用錢九萬九千九百九拾九文、買到某地云云」と朱書したもので、村巫（田舎のまじない師）の風俗であるとしている<sup>1</sup>。これは墓券について著述された最古のものと言えよう。

墓券とは、墓地のための土地売買の契約を記した副葬品であり、土

地の持ち主（売り主）と買い主の氏名や土地の範囲・値段等を記載し、所有権のありかを明確にするものである。前掲のように、宋代ではすでに買地券と呼ばれ、また「地契」「地券」「買田券」「買地別」などの呼称が使われてきたが、一般的には地券、買地券と呼び習わされている。しかし、これらが一般の土地ではなく墓地に限定した売買契約であること、墓内に副葬された品であり、基本的に買い主の名が被葬者となっていること、また、形態は同じでも土地売買の事項が少なく呪術的な要素を多く含む、いわゆる鎮墓券の存在などを勘案すると、

原田正巳氏、池田温氏のひそみに倣い、本稿ではこれらを総称して「墓券」の語をもちいることにしたい。また必要のある時は、券文の内容からさらに「買地券」「鎮墓券」と区別して称することにする。第二章に述べる先学の研究史においても、煩雑さを避けるために、各々の著者の意味するところに注意しながらその都度「墓券」「買地券」「鎮墓券」に換言して用いることをここに言い添えておきたい。

墓券は後漢時代以降近現代までの墓から出土しており、中国のみならず朝鮮半島、日本においても数例発見されている。ただ現在までに発見された墓券は金属製や埴製、石製のものがほとんどで、周密の記した木製の例は唐宋の墓券に数例見えるのみである。これは材質の特性によるものであろう。

宋代の金石学では、墓券はあまり注目されなかったようであるが、清代に至り收藏家や金石学者たちによつて墓券の収集・研究がなされたのをきっかけにして、現在まで多くの研究が積み重ねられてきた。本論ではその研究の沿革を振り返り、その中で問題点を明らかにしつつ、私見を披瀝することにした。近年ますます盛んになりつつある墓券研究における他山の石にもなれば幸いである。

## 一、後漢墓券の釈文と和訳 [表1 後漢時代の墓券]

現在までに知られている後漢時代の墓券は、二十八点である。<sup>(2)</sup>うち紀年の確認が可能なものは二十五点で、最も早い紀年が章帝建初六年(八二)、最も遅い紀年は靈帝中平五年(一八八)である。また多くが

伝世品であり、考古学的発掘を経て出土・発表されたものは僅か三点である。よつて出土地域の確定は本来その多くが困難ではあるが、券文中の売主・買主の住所等の記載によつて判断できるものも多く、河南省が最も多いほか、河北省・江蘇省・また伝を信じれば、浙江省・山西省からも出土している。

券文は基本的に定型化しており、本章ではこの中から特徴的で保存状態が良好である墓券三点について、年代順にその釈文を紹介して現代日本語訳を付し、墓券の全体像を観察する。

### 〔建初六年武孟子男靡嬰墓券〕

〔釈文〕 建初六年十一月十六日乙酉、武孟子男靡嬰、買馬弘宏朱大弟少卿冢田、南広九十四歩、西長六十八歩、北広六十五、東長(以下背面)七十九歩、為田二十三畝奇百六十四歩。直錢十苗二千、東陳田比介、北西南朱少比介。時知券約趙滿・何非、沽酒各二斗。

〔訳〕 建初六年十一月十六日乙酉。武孟子の息子である靡嬰が、馬弘宏、朱の弟少卿の墓地を買う。南は幅九十四歩、西は長さ六十八歩、北は幅六十五、東は長さ七十九歩、土地面積は二十三畝と余り百六十四歩である。金額は十萬二千錢、東は陳の土地に接し、北西南は朱少卿の土地に接する。この契約の証人は趙滿・何非である。(契約締結の証として) それぞれ酒を二斗買い飲んだ。

### 〔延熹四年鐘仲游妻墓券〕

〔釈文〕 延熹四年九月丙辰朔卅日乙酉直閉、黃帝告丘丞、墓伯、地下

二千石、墓左墓右、主墓獄史、墓門亭長、莫不皆在。今平陰僊人鄉裏富里鐘仲游之妻薄命蚤死、今來下葬。自買萬世冢田、賈直九萬九千、錢即日畢。四角立封、中央明堂、皆有尺六桃卷、錢布、銅人。時證知者、先□曾王父母、□□□氏知也。自今以後不得干□主人。有天帝教。如律令。

(訳) 延熹四年九月丙辰朔卅日乙酉直閉。黃帝が、丘丞、墓伯、地下二千石、墓左墓右、主墓獄史、墓門亭長に告げる。皆それぞれの場所(3)にいないことがないように。今、平陰(河南省孟津県)の僊人郷裏富里の鐘仲游の妻が薄命にして早死にをし、今葬られる。自ら萬世の墓地を買った。金額は九萬九千錢、支払いは即日完了した。四隅に封を立て、中央に明堂を設置する。皆一尺六寸の桃卷、錢布、銅人あり。立会人は、先□曾王父母、□□□氏が証人である。今後、この墓地の主人を乱してはならない。天帝の教あり。以上律令のごとく施行せよ。

#### 〔建寧四年孫成墓券〕

(釈文) 建寧四年九月戊午廿八日乙酉、左駿厩官大奴孫成、從洛陽男子張伯始、売所名有広徳亭部羅伯田一町。賈錢萬五千、錢即日畢。田東比張長卿、南比許仲異、西尽大道、北比張伯始。根生土着毛物、皆屬孫成。田中若有尸死、男即當為奴、女即當為婢。皆當為孫成趨走給使。田東西南北、以大石為界。時傍人樊永・張義・孫龍、異姓樊元祖、皆知張約。沽酒各半。

(訳) 建寧四年九月戊午廿八日乙酉。左駿厩の官の大奴孫成が、洛陽の男子張伯始から広徳亭部羅伯の土地一町を買う。価格は一萬五千錢、

支払いは即日完了した。土地の東は張長卿の土地に接し、南は許仲異の土地に接し、西は大道に接し、北は張伯始の土地に接している。この土地の動物は、皆孫成のものである。(3)地中にもし死体があれば、男は奴に、女は婢とし、皆孫成の奴隸とする。土地の東西南北に大石を置いて境界とする。立会人は樊永・張義・孫龍、異姓の樊元祖であり、皆この契約の証人である。(契約締結の証として)酒を折半にして買ひ、飲んだ。

以上紹介した三点の墓券から、これら墓券が概して土地売買契約の形式に倣い、共通した記載事項を有していることが確認できよう。すなわち、

- 一、契約の年月日、干支。
- 二、土地の買い主、その住所。
- 三、土地の売り主、その住所。
- 四、土地の四至、面積、価格。
- 五、契約の立会人、証人。

六、契約締結の証としての結語、「沽酒各半」「如律令」である。延熹四年鐘仲游妻墓券は、干支の後に「直閉」と日選びの建除十二直が付加されている。また黃帝が丘丞・墓伯以下地下冥界の官吏たちに移文をする形式を採るなど、同時期に中原地域において盛行した鎮墓瓶との類似点がみられる。(4)次に、研究史を振り返りながら問題点を探っていく。

表 1 後漢時代の墓券

No.	紀年	出土地	材質	釈文	出典
1	建初六年 (81)	伝山西忻州	青玉	建初六年十一月十六日乙酉、武孟子男雍嬰、買馬張宏朱大弟少卿冢田、南広九十四歩、西長六十八歩、北広六十五、東長(以下背面)七十九歩、為田二十三畝各百六十四歩。直錢十兩二下、東陳田比介、北西南朱少比介。時知券約趙滿・何非、沽酒各二斗。	『陶齋藏石記』 『地券徵存』 『崑崙遺珍』
2	元嘉元年 (151)		鉛	元嘉元年十月十一日□□袁孝劉家。如律令。(背面に符)	『貞松堂集古遺文』
3	元嘉二年 (152)		鉛	(不詳)	『地券徵存日録』
4	延熹四年 (161)	伝河南省 孟津	鉛	延熹四年九月丙辰朔卅日乙酉直閉、黃帝告丘系、墓伯、地下二千石、墓左墓石、主墓獄史、墓門亭長、莫不皆在。今平陰假人鄉長富里鍾仲游之妻薄命蚤死。今來下葬、自買萬世冢田、賈直九萬九千、錢即日畢。四角立封、中央明堂、皆有尺六桃卷、錢布銅人。時證知者、先□曾王父母、□□氏知也。自今以後不得下□主人。有天帝教。如律令。	『貞松堂集古遺文』
5	建寧元年 (168)	伝浙江省 蕭山縣	磚	(甲) 兄弟九人從山公買山一丘、於五鳳里、葬父馬衛將。直錢六十万即日交畢。建寧元年正月合額、大吉左。有私約者當律令。(上方横書き「富貴長」3字)	『越中占刻九種』 『循園金石文字跋尾』
6			磚	(乙) 建寧元年二月五鳳里番延壽墓額兄弟九人從山公買山一丘、於五鳳里、葬父馬衛將。直錢六十万即日交畢。分過券台合額大吉立石。建寧元年二月期。有私約者當律令。	同上
7			磚	(丙) 飛馬(下方人物画像)。建寧元年山陰五鳳里番延壽墓額。	同上
8			磚	(丁) 建寧元年正月山陰番延壽墓額。兄弟九人從山公買山一丘、於五鳳里、葬父馬衛將。直錢六十万即日交畢。建寧元年正月合額、大吉左。有私約者當律令。	同上
9			磚	(戊) 建寧元年八月北鄉五鳳里番延□…	同上
10			磚	(己) 建寧元年八月十日造作。	同上
11			磚	(庚) 馬衛將作。	同上
12			磚	(辛) 大吉兮多所宜。	同上
13			磚	(壬) 大富千。	同上
14			磚	(癸) 兄弟九人從山公買山一丘、於五鳳里、葬父馬衛將。直錢六十万即日交畢。建寧元年正月合額大吉左。有私約者當律令。子孫。	同上
15			磚	元年九人□山公買山一丘、於五鳳里、葬父馬衛將。直錢六十万即日交畢。分置券臺合額、大吉立石。建寧元年二月朔□□番當律令。	青道博物館藏
16	建寧二年 (169)	伝洛陽	鉛	建寧二年八月庚午朔廿五日甲午、河内懷男子王木脚、從河南河南街郵部男子袁叔威、買寧門亭部什三陌西袁田三畝。畝賈錢三千一百、并直九千三百。錢即日畢。時約者袁叔威。沽酒各半、即日丹書鉄券為約。	『貞松堂集古遺文』
17	建寧四年 (171)	伝洛陽	鉛	建寧四年九月戊午廿八日乙酉、左職監官大奴孫成、從洛陽男子張伯始、売所名有広徳亭部羅伯田一町。賈錢萬五千、錢即日畢。田東比張長卿、南比許仲異、西尽大道、北比張伯始。根生土着毛物、皆屬孫成。田中若有尸死、男即當為奴、女即當為婢。皆當為孫成趨走給使。田東西南北、以大石為界。時傍人樊永・張義・孫龍、異姓樊元祖、皆知張約。沽酒各半。	『地券徵存』 『高里遺珍』
18	熹平五年 (176)	江蘇省揚州 甘泉山劉元 台墓	磚	熹平五年七月庚寅朔十四日癸卯、広○鄉樂成里劉元台、從同縣劉文平妻○買代夷里塚地一垧。賈錢二萬、即日錢畢。南至官道、西尽墳墳、東与房親、北与劉景○為家。時臨知者劉元泥、枕安居、共為卷書平折。不當壳而壳、幸右所禁園。平○為是正、如律令。	『文物』1980-6、 57-58
19	熹平六年 (177)		鉛	熹平六年九月癸未朔廿四日□午…日去…民人…□□西属長安、死人東属太山。生人属陽、死属陰。生人□□□無相干□…	原田正巳1963
20	光和元年 (178)	河南省 孟津カ	鉛	光和元年十二月丙午朔十五日、平陰都鄉市南里曹仲成、從同縣男子陳胡奴、賈長谷亭部馬領陌北家田六畝。…千五百、并直九千、錢即日畢。田東比胡奴、北比胡奴、(背面)西北胡奴、南尽松道。四比之内、根生伏財物一錢以上、皆屬仲成。田中有伏尸既骨、男當作奴、女當作婢、皆當為仲成給使。時旁人賈・劉、皆知券約。他如天帝律令。	『書道全集』 旧版第三卷
21	光和二年 (179)	洛陽東方紅 トラクター 工場1号墓	鉛	光和二年十月辛未朔三日癸酉、告墓上墓下中央主主、敢告墓伯・魂門亭長・墓主・墓皇・墓伯。青骨死人王當弟儉・儉及父元興等、從河南□□左仲敬子孫等、賈錢鄉亭部三陌西袁田十畝、以為宅。賈直錢萬、錢即日畢。田有丈尺、卷書明白。故立四角封界。…至九天上、九地下。死人婦高里、地下不得何止、他姓不得名佑。富貴利孫、主當・弟儉・儉及元興等、當來人祇無得勞苦、苛止勿勿驕使。無責生人父母兄弟妻子女家、生人無責、各令死者無過負。即欲有所為、待焦大豆生、鉛卷華榮、鷄子之鳴、乃与諸神相聽。何以為奠、鉛卷尺六為奠。千秋万歳、後無死者、如律令。卷成。日本曹奉祖田、壳与左仲敬等。仲敬軼与王當弟儉・儉・父元興。約文□□、時知黃唯・留登勝。	『文物』1980-6、 52-56
22	光和四年 (181)		鉛	(不詳)	青道博物館藏
23	光和五年 (182)	河北省望都 縣2号漢墓	磚	□和五年二月戊子朔廿八日乙卯、□□□帝神□、敢告墓上墓下…上中主主・墓□永□・地下二千石・墓主・墓皇・墓伯・東阡西陌・東…南成北□魂□□□□・中游戲・伯門卒史。□太原太守中山蒲陰助所博成里劉公…早死。今日合畝□□□□上天倉天、下天黃泉。青骨死人劉公、則自以家田三梁□…東伯南田廿八畝、南北長七十歩、東西広九十六歩、中有大尺、券書明白。故立四角封界、□…大□士、謹為劉氏之家、解除各殃。五錢六□、女□□玁七十二不□天□□光、八□九□、或有…□□不□。生死異路、不得相妨。死人婦高里戊己、地上地下、不得苛止。他□不…無適、有富利。生人子孫□□無得勞苦、無呼□□、無得苛中、無責…今死人無道、□即□□得、待鳥大豆生、段鷄上雞鳴、□券華榮、…諸神□□□為□尺六桃□為□□則絕、其上絕天文、下絕地理、□墓葬□□適解除。千秋万歳、…復死者、世世富貴、永宜子孫、…。	『望都2号漢墓』
24	光和七年 (184)	伝洛陽	鉛	光和七年九月癸酉朔六日戌寅、平陰男子樊利家、從洛陽男子杜調子○弟□、賈石梁亭部桓千桑比是伯田五畝。…三千、并直萬五千、堯即日畢。田中根土著、(背)上至天、下至黃、皆□□行田、南尽伯、北東自比調子、西北羽林孟□。若一旦田為吏民桑胡所名有、調子自當解之。時旁人杜子陵・李季盛。沽酒各半、堯千無五十。	『貞松堂集古遺文』
25	中平五年 (188)	伝洛陽	鉛	中平五年三月壬午朔七日戊午、洛陽大女房桃枝、從同縣大女趙敬、賈広徳亭部羅西邊步兵道東家下余地一畝。直錢三千、錢即日畢。田中有伏屍、男為奴、女為婢。田東西南北旧狄、北比樊漢昌。時旁人樊漢昌、王阿順、皆知卷約。沽各半、錢千無五十。	『貞松堂集古遺文』 『中國書法全集』九
26	□平□年 (2世紀後期)	伝洛陽	鉛	□□年十月□□□□辛亥、河南男子□孟叔、從洛陽男子王孟山・子男元顯・子男富年、賈所名有…田□畝。賈錢萬、即日畢。□堯□孟山・元顯・富年□田西北比□□□□賈…田□□□孟叔。便□□□□、上至蒼天、下至□□。□…九□□樊□元、皆知卷約。沽酒各□。	『芒洛家墓遺文四編』
27	漢年次未詳 (2世紀)		鉛	…月乙亥朔廿二日丙申朔、天帝下令、移前洛東鄉東郡里劉伯平、薄命蚤…西、棄不能治。歲月重復、適与同時魁鬼院注、皆婦墓父。大山君召…(背)相念、誓勿相思。生属長安、死属大山。死生異地、不得相防。須河水清、大山…六丁有天帝教、如律令。	『貞松堂集古遺文』
28	漢年次未詳 (2世紀)		鉛	…□□西、生人□人出郭、死生異地、莫相干□。生人属西長安、死人属太山。丘系墓伯、□(背)…南、故為丹書鉄卷、手及解過。千秋万歳、莫相來索、如律令。	『貞松堂集古遺文』

贗作の疑いあるものは省いた。

## 二、墓券研究史

### 1 墓券研究の黎明期

先に述べたように、清代の收藏家・金石学者たちによって墓券の積文が知られるようになったが、今この全てを挙げることはしない。清末の葉昌熾は『語石』巻五、買地茆の条において、漢以降各時代の代表的な墓券を挙げて券文の特徴的な言辞について明瞭に論じており、墓券文の概略を理解することができる。また端方收藏の膨大な金石類を纏めた『陶齋藏石記』には、建初六年武孟子男靡嬰墓券をはじめ数点の墓券が収められており、字義や地積の計算等から券の真偽の考証が試みられている。

最も墓券に注目し、多くの墓券をその著録に収載したのは羅振玉である。四点の墓券の拓本を収める『蒿里遺珍』においては、端方の考釈を検討し訓詁学的考察を加え、さらに墓券内容において、土地を人間から購入する形式と鬼神から購入する形式とに分類している。また『古器物識小録』においては、墓券一点と鎮墓瓶四点とを併せて「鎮墓文」としてその釈文を紹介している。『貞松堂集古遺文』巻一五では、あらゆる金文の模写図と釈文を載せる中で墓券七点を収め、各券に対して「買地鉛券」と「鎮墓券」の名称を与え区別をしている。また鎮墓瓶との相違を挙げるなどして考察を加え、「漢季、道術を高尚すること此において一斑を見るべし。米巫の禍、蓋しすでに此に兆す。」と述べ、道教との関連を示唆している。さらに墓誌等の墓出土の文字資料目録である『蒿里遺文』においては、特に墓券を集めた「地券徵

存目録」を立て、墓券のみを扱った『地券徵存』においては、墓券の出土地、形質などのデータを示し、玉質・方形のものや鉛質・簡冊状のもの、また磚質のものが多く見られ、古いものは小さく後代のものは大型であるといった、墓券の形質の変遷について論じた。また券文記載の地名は河南・河北・陝西・江蘇・浙江・江西・湖南等の諸地域にわたるが、その文面には地域差を認め難いことなどを指摘した。朝鮮半島出土の墓券も収録している。こうした羅振玉の一連の研究がすなわち墓券の基礎的研究であると言つてよいだろう。

また画家であり書家でもある日本の中村不折は、『書道全集』旧版第三巻<sup>(6)</sup>において所蔵する墓券二点の写真と釈文を載せ、その書風書体を中心に解説を付している。

以上の研究史を顧みると、まさに墓券研究の黎明期であったと言うことができよう。金石学の発展に伴つて墓券が再発見され、ようやく研究の対象として認識され始めた時期であるが、資料数も少なく、系統立てた墓券研究はいまだ困難であった。

### 2 墓券研究の発展期、一九三〇—一九六〇年代

法制史研究の資料として墓券を用い、墓券研究の新たな局面を開いたのは仁井田陞氏である。仁井田氏は「漢魏六朝の土地売買文書」<sup>(7)</sup>において、漢—三国時期に盛行した土地売買の状況を述べる上で、土地売買文書の形式を有する墓券に注目して特に「墓田売買文書」「鉛券」等と称し、その宗教性に留意しながら、一般の現実の土地売買文書と一括して取り上げ、契約に関する構成要素ごとに文書中の文言を分類

して詳細な考証を行っている。その中で、「鉛券」においてしばしば土地の売り主が「土公」「山公」等の土神であったり、買地の四周である四至を甲乙、丙丁……や青龍、白虎……と表わしたり、土地の代価を「三千貫」等大きな数字で表わす例が見られることなど、一般の土地売買文書との相違点を明確にした。この仁井田氏の論考について、漢魏六朝における全ての墓券が現実世界での土地売買文書であると述べているかのように認識し、これを一つの説として捉える向きもあるが、これは誤りである。<sup>(8)</sup>氏は、鎮墓的な叙述のない買地券をして現実の契約文書であると把握しているにすぎない。また土地売買の記載のない、宗教的な要素が強く「如律令」という結語を用いる墓券に関しては「鎮墓券」として別に数例紹介するなどしている。

台湾の台静農氏は、現代の四川省江津県において埋葬の際に道士が燃やす木版印刷の墓券を紹介し、漢・宋時期の墓券の共通する文言を挙げ、簡潔な考察を行っている。<sup>(9)</sup>

一方、原田正巳氏は墓券・鎮墓瓶を中心とした体系的な鎮墓文研究に先鞭をつけたと言える。氏はまず「民俗資料としての墓券」上代中国人の死霊観の一面<sup>(10)</sup>において後漢から明までの二十六点の墓券を俯瞰し、漢晋の資料を中心として考察している。墓券には『礼記』に記されるような魂魄の明確な区別はないことをはじめ、『莊子』等さまざまな文献における死生観の記載を参照し、墓券の記述との相違点を挙げた。また『楚辞』招魂における、天帝の命を受けて巫がこの儀礼を行い魂が天帝の支配を受けるということが、墓券の記載と一致していると指摘している。また墓券で「死者属東方泰山」というように

死者と東方とを結びつける思想のあることを示すなど墓券の性格を浮彫りにし、券文中の民間信仰の要素に着目してその後の墓券研究に大きな影響を与えた。

さらに原田氏は「墓券文に見られる冥界の神とその祭祀」<sup>(11)</sup>において、後漢の鎮墓券文中に、天帝あるいは天帝の使者が地下冥界の神々や官吏たちに向かって新たに死者のあることを告げその支配を委ねるといふ伝達経路の見られること、また「死生異処」など、生者と死者とを截然と区別し生者から遠ざけようという表現の多く見られることなどを指摘した。また魏晋南北朝期の墓券にも考察は及び、売買契約の証人として東王父・西王母など神仙の名があらわれ、天帝の使者のかわりに太上老君が支配するという道教的墓券、また仏教的要素の見られる墓券など、墓券内容の変遷を説明している。また宋代の墓券に見える風水説から進んで堪輿家のことについても詳しく考察する。さらに『論衡』解除篇の、土を動かすことで土神のたたりを恐れこれを祓わんとする「解社土神」の祭りの記載と、墓券及び鎮墓瓶中の「解」「解適」の記述とに関わりがあることを明示した。この「解」については、基本的には原田氏の論考を受け継ぎながら、その後の多くの研究の論点となった。

### 3 一九六〇～七〇年代 墓券の真贋、および分類と名称

新中国の誕生以降、考古発掘による墓券の出土が徐々に増えた。漢代墓券では、一九五九年に上梓された『望都二号漢墓』に墓券の出土が報告されている。また六〇年代に至って、朱江氏、程欣人氏による

出土墓券の紹介が相繼ぐなど、一九六〇年代は墓券が衆目を集めはじめた時期と言えよう。<sup>(12)</sup> また、光緒二十二年（一八九六）に浙江省平陽県宜山郷鯨頭村の農民によって発見され、呉承志の考証によって晋代の遺物と判明した後行方がわからなくなっていた咸康四年（二三八）朱曼妻薛墓券が、数奇な運命を辿ってようやく発見され、方介堪氏によって確認・発表されている。<sup>(13)</sup>

資料数の増加により、これまでの全時代及び全地域を俯瞰した広く浅い墓券研究から、各時代ごとまたは各地域、あるいは個別的な墓券研究への移行が見られるようになり、より緻密な研究がなされるようになった。<sup>(14)</sup> また、一九七三年から一九七八年の間の方詩銘氏と李寿岡氏による伝世墓券の真偽をめぐる一連の論争も、出土墓券の増加に伴い精緻な研究を進めるうえで、資料の質を問う資料批判の必要性がでてきたことのあらわれであろう。まず方詩銘氏は、「従徐勝買地券論漢代『地券』的鑑別」において、漢代の墓券の真贋を見極める方法として、一、干支紀日、二、地名や行政区画、三、土地の価格や名称及び慣用句、の三つが当時の実際の状況と一致するか否かという着眼点を挙げた。<sup>(15)</sup> この論考に対して李寿岡氏は、「也談『地券』的鑑別」<sup>(16)</sup>において、墓券はあくまで副葬品であり、「半兩」泥銭や「郢称」泥金板のように、一般の土地売買文書を模倣したものに過ぎないと反駁した。干支や地名も任意で写したものであるから、誤りがあっても単に不真面目に写した結果であると述べている。しかしこの李氏の駁論は、方氏が漢代の買地券に限定しているのに対して、後代の鎮墓券をも含むものであった。

これを受けて方詩銘氏は「再論『地券』的鑑別——答李寿岡先生」<sup>(17)</sup>において、前稿が漢代の買地券に限定したものであったことを確認し、「鎮墓券」は「買地券」から発展したものではなく両者は同時期に並存していて、その内容も作用も異なるものであったと述べた。そして漢代の墓券の多くが鉛券であるのは、「丹書鉄券」が当時の売買文書の一形式であったからであると説明した。また居延漢簡、敦煌漢簡にも土地や衣類の売買文書があり、墓出土の買地券とほぼ同形式であることを引き、買地券が現実の土地売買文書であると抗弁している。この一連の論争を通して、買地券の定義、また買地券と鎮墓券の線引きを明確にする必要性が明らかになり、ここに新たな課題が示されたと言えよう。

杉本憲司氏は一九七九年、「漢墓出土の文書について——特に湖北江陵鳳凰山漢墓について——」において、墓から出土する文書の持つ特殊性について、後学の指針ともなる重要な説を提唱している。<sup>(18)</sup> すなわち、墓出土の文書はあくまで冥界の主に対する申告、地下官吏が検閲するという前提で書かれ副葬されたのであって現実のものではないこと。公文書を模倣した文書であっても、やはり墓に入れるための明器の文書であり、その点では公文書としての性格はなく、明器として考えるべきであり、研究の際そうした姿勢が必要であると述べている。そして江陵鳳凰山漢墓十号墓出土の遺策及び一六八号墓出土の竹牘に、墓主である嗟という人物の爵位が「五大夫」であることが書かれているが、上記のことを勘案するにこの爵位は誇張と推測されること、また買地券における価格が非常に高いことをとりあげ、「地下の冥府の主

に対して、冢田として買った土地の価格を高く申告することによって、墓主人が生前にはそれだけの富を持った人であったと、誇張して申告していたのではなからうか。」と論じている。

ここで墓券を副葬する目的を再度考えてみよう。まず、「鎮墓券」が文字通り靈魂を鎮める目的をもって副葬されることは至当の事である。では買地券はどうであろう。買地券とは、一言で定義すれば、墓を造営し死者を葬るために遺族が土地を買い、その所有権を明確にすること、他者との無用の争いを防ぎ、死者が安寧に眠ることができよう計らう意図のものである。他者とは、地上の人間であり、また券文中に見える地中の屍である。だからこそ墓券を死者と共に副葬するのであらう。とすれば、ここですでに買地券には「鎮墓」の役割が備わっていることになる。買地券が単に土地の売買契約書であるならば、ことさらにこれを墓に副葬する意味はないのである。やはり買地券は明器であり、これを公文書と捉えることは妥当ではないと筆者は考える。

#### 4 一九八〇年代

ここからは特に漢代の墓券に関する一九八〇年代以降の研究を振り返る。

湯浅幸孫氏による「地券徵存考釋」<sup>(19)</sup>は、漢代から明代までの墓券中の特徴的な十五例を釈読しそれぞれに詳細な考察を加えるものである。墓券文を一つ一つ読み解く論考は、それまで発表されてこなかった。他の墓券文を釈読する上でも、非常に参考になる論考といえる。

呉榮曾氏の「鎮墓文中所見的東漢道巫關係」<sup>(20)</sup>は、後漢鎮墓文研究の新たな方向性を示した論文である。後漢時代の鎮墓文が、民間信仰の所産であることはすでに原田氏によって描出されていたが、呉氏は、鎮墓文は巫が道に吸収される段階の時期の産物であり、初期道教の要素を多分に備えていることを鎮墓文中の文言を逐一挙例して指摘したのである。また「解適」という文言が、『論衡』解除篇の記載にある、土を動かすことで土神の怒りを受け災いが降りかかることを恐れ、祭祀を通してこれを取り除こうとする意であることを明瞭に説明している。<sup>(21)</sup>さらに、鎮墓文が「謹告」「移」「令」「如律令」などの文言を用い、これが当時の官府の文体を模倣したものであることにも言及している。

七〇年代の方詩銘氏と李寿岡氏による論争を受ける形で、一九八二年、呉天頴氏は漢代の墓券を総合的に考察した大部の論文「漢代買地券考」を発表している。<sup>(22)</sup>氏はまず墓券を二種類に分類する。すなわち早期の、実際の土地売買文書を模倣したもので真实性が高く土地売買研究の史料価値も高いものを「甲型買地券」、また晩期のもので券文は千篇一律で迷信的要素の濃厚なものを「乙型買地券」とする。また方詩銘氏の干支を確認する鑑定法の限界を説き、いくつかの偽券の検証を詳細に行った。さらに甲型買地券が現実の文書であるか否かという問題については、土地契約は本来代々受け継がれてゆくものであり甚だ重要なものである旨を説明し、また買い主と売り主の両者が売買券契を持つという主旨とも根本的に対立するものであるもので、実際の土地売買文書を副葬することはありえないと結論付けた。



また買地券の起源について、これを湖北江陵鳳凰山八号墓など前漢初期墓より出土する「簿土」に求める、非常に興味深い考察を行っている。さらに「甲型買地券」から「乙型買地券」への変化の過程について、二種類の形式が窺えたと述べ、すなわち一、基本的に土地契約が主要な内容であるが、鎮墓解適的な文言が含まれるもの。例として光和二年王当墓券を挙げる。<sup>(23)</sup>二、鎮墓的要素を基礎にして、さらに虚偽誇張が進んだ土地価格や、売り主が土地神の神仙や土公であるもの、つまり鎮墓解適と冥府へ向けた土地売買の証明という二つの意義を持つことから、完全に鎮墓券と言えるものではない墓券であり、後代長く使用された形式であるという。この例として延熹四年鐘仲游妻墓券を挙げる。以上の結論として呉氏は、墓券の起源と変化の過程として、

土地実物（簿土）や模型（陶田）↓現実の模倣をした「甲型買地券」↓二種の過程↓全くの迷信である「乙型買地券」

という図式を考えていることになる。さらにこの変化の背景として、土地兼併が熾烈になり、社会矛盾が深刻化し、また天人感応や籤緯思想も加わって死後も靈魂が不滅の鬼神觀念が更に深まった社会条件下において、「甲型買地券」は加速的勢いで「乙型買地券」へと向かっていったと説明するのである。<sup>(24)</sup>また鉛の使用についてなど、他にも興味深い説を発表しており、漢代墓券の一応の集大成的な論考になっている。

また同年呉氏の論考と相前後する時期に、改革解放以降出土数が年々増加したことを受けて、ほとんど知られる限りの墓券及び鎮墓瓶の釈文を網羅一覧した、池田温氏の「中国歴代墓券略考」が発表された。<sup>(25)</sup>その

数は参考資料として挙げた買山記等も含めて約一五〇点余にも及び、さらに墓券の研究史、年代地域、外形、内容から真贋の問題まで簡潔に論じ、以後の墓券・鎮墓瓶研究には決して欠かすことのできない論文となっている。

このほか買地券の現実性については、富谷至氏が、「黄泉の国の土地売買—漢魏六朝買地券考—」<sup>(26)</sup>において、居延漢簡中の土地や衣類等の売買文書を挙げ、木札の端に見える黒点が、契約者双方の持つ、合わせれば一対となる契約証書の印であると論じ、墓券にはそういった形跡がみとめられないことから、「想像の域を脱し得ないが、おそらく墓田売買に関しては、売り手と買い手双方がそれぞれ有する一対の契約文書、それとは別に、墓に埋葬する文書の少なくとも三種のものが作成されたのであろう。」という興味深い推測をしている。その上で、後漢の買地券は、当時一般の売買文書の形式とは異なるところがあるものの内容は現実性を有した文書に類するものであると結論付けている。また漢と三国の間で内容が変化し、呪術的な性格を多分に有するようになると指摘し、氏は同時期に存在していた鎮墓瓶に注目して、後漢の買地券に鎮墓瓶の銘文が合流して「護符的墓券文」へと換骨奪胎したと述べる。

また道教とのかかわりについて、劉昭瑞氏は、鎮墓瓶の銘文にみられるいくつかの文言が『太平経』の記載と共通すると指摘した論考をはじめ、鎮墓文に関する一連の研究を発表しているが、<sup>(27)</sup>中でも注目すべき点は後漢時代の罪の意識について、『太平経』に見える「承負」の觀念を挙げ「解適」との関連を指摘している点である。承負については、また稿を改めて述べたい。また二〇〇一年劉祥瑞氏は、『漢魏

石刻文字繫年』を上梓し、附録として墓券、鎮墓瓶、鎮墓刻石等を併せて漢魏鎮墓文と称し、一覽した。<sup>(28)</sup>

また高倉洋彰氏は「漢代買地券の検討」<sup>(29)</sup>において、漢代の買地券を、基本的に短冊形鉛券で現実的な土地売買契約書を模し「沽酒各半」を結語とすることの多い第Ⅰ型、幅広長方形の博券で呪符的な内容に変化した「如律令」で終わることの多い第Ⅱ型の二つに分類した。その上で、買地券の出現と展開過程として、「現実世界の土地売買契約書、それを模した第Ⅰ型買地券、信仰の祭具に変化した第Ⅱ型買地券」という順序を提唱している。結語による分類は興味深い。

小南一郎氏は「漢代の祖靈觀念」<sup>(30)</sup>において、殷周時代から後漢に到るまでの靈魂觀の変遷について、特に漢代において靈魂と肉体をめぐる觀念に大きな変化があったとすると述べる。すなわち死者の靈魂が墓地にとどまり、あるいは墓を通じてこの世に帰って来るとする新しい祖靈觀念が定着したと述べるのである。氏は資料として主に鎮墓瓶を扱ったが、買地券についても言及しており、冥界に関する記述を基準にした分類を行っている。それは直接には冥府の組織に言及しない第一類、及び冥府に関する言及の多い第二類である。この第二類と鎮墓瓶とに見られる冥府の官名を整理し、ここから、「いくつかの違う系統の冥官の統合が進行していたことの結果」であると述べる。氏の言わんとするところはすなわち、いくつかの異なる冥界觀が存在していたが、鎮墓瓶と鎮墓券に到ってそれらが合流しつつあったということであろう。

曹岳森氏は、「買地券研究三題」において、研究史をまとめた上で四川の買地券について言及している。また鎮墓券と買地券の混同を指摘し、

その区別について、買地契約についてはつきり書かれているものが買地券、もっと自由なものが鎮墓文であり、買地券以外の鎮墓文字をどう称するか、またどう分類するかについて、さらなる研究が必要であると提唱する。<sup>(31)</sup>

特に墓券を扱うものではないが、墓券の材質に関して考える際参考になりそうなのが、王育成氏「考古所見道教簡牘考述」である。氏はこの論考において、後漢代以降の考古資料と文献記載の両方の角度から、道教で用いる木、鉛、玉、金、銀、銅、鉄質の簡牘の情況を検討した。<sup>(32)</sup>世俗社会で普遍的に紙が使用されるようになって、道教の方術儀式活動では広く簡牘形の鉛券や玉券が使用され、道教文献においても「簡」の文言が多く見られることに着目し、道教で使われる簡牘を、形状・目的で分類している。道教簡牘は、先秦兩漢の書写材料の継承であり、あるいはすでに衰退した古代の簡牘文化が宗教領域内で復活・継続し発展したものであるとしている。

### 三、墓券の分類

以上、墓券研究の沿革と問題点について述べてきたが、ここで墓券の分類について改めて整理をしたい。まず羅振玉は、人間から購入する形式と鬼神から購入する形式とに分け、また「買地鉛券」、「鎮墓券」という名前を付けた。これは現在も常用されている名称である。

また吳天穎氏は、主に後漢時代の墓券を扱う中で、早期の、実際の売買文書を模したものを「甲型買地券」、またそこから変化した、晩

表 2 後漢墓券の記載内容

No.	紀 年	買 主	売主	被葬者	土中の屍	冥界関連	結語	分類
1	建初六年 (81)	武孟子の息子 靡嬰	馬馳妻朱 大弟少卿	—	—	—	沽酒各 二斗	I a
2	元嘉元年 (151)	—	—	袁孝劉	—	—	如律令	—
3	元嘉二年 (152)	—	—	—	—	—	—	—
4	延熹四年 (161)	鍾仲游妻	—	鍾仲游妻	—	黄帝告丘 丞墓伯…	如律令	II
5	建寧元年 (168)	兄弟九人	山公	馬衛將	—	—	当律令	I b
16	建寧二年 (169)	王末卿	袁叔威	—	—	—	沽酒各半	I a
17	建寧四年 (171)	孫成	張伯始	孫成	○	—	沽酒各半	I b
18	熹平五年 (176)	劉元台	劉文平妻	—	—	—	如律令	I a
19	熹平六年 (177)	—	—	—	—	—	—	—
20	光和元年 (178)	曹仲成	陳胡奴	曹仲成	○	—	如天律令	I b
21	光和二年 (179)	青骨死人王当 弟個・儉及び 父元興等	左仲敬子孫等	青骨死人王 当弟個・儉及 び父元興等	—	告墓上墓 下…	如律令	II
22	光和四年 (181)	—	—	—	—	—	—	—
23	光和五年 (182)	青骨死人劉公	—	青骨死人劉公	—	□帝神□敢… 告墓上墓下	—	II
24	光和七年 (184)	樊利家	杜譚子 々弟□	—	○	—	沽酒各半	I b
25	中平五年 (188)	房桃枝	—	—	○	—	沽各半	I b
26	□平□年 (2世紀後期)	□孟叔	王孟山・ 息子元顯 と當年	□孟叔	○	—	沽酒各□	I b
27	漢年次未詳 (2世紀)	—	—	劉伯平	—	天帝下令	如律令	II
28	漢年次未詳 (2世紀)	—	—	—	—	丘丞墓伯…	如律令	II

No.6-15は、No.5と同墓出土のため省略  
剥落が多く分類が不可能なものは一であらわした。

期の迷信的要素の濃厚なものを「乙型買地券」とした。その変化の過程において、土地契約を主要内容としつつも鎮墓解適的な文言が含まれるもの、また鎮墓的要素が基礎にあり土地契約内容もさらに誇張されたものが見られるとされている。筆者は、基本的には呉氏のこの分類に賛成であるが、さらに詳細な墓券の形状・形質と券文との関わりの考察を行った結果、後漢時代の墓券において、次のような新たな分類を得ることができた。

まず、これまで「買地券」として一つに分類されていた墓券は、実は二種類に分かれていると言える(表2)。すなわち、

I a 類型、現実の土地売買に模し、極めて簡潔な形式を具える。この分類には、すでに本稿の第一章で釈文と和訳を記した建初六年武孟子男靡嬰墓券のほか、建寧二年王末卿墓券、熹平五年劉元台墓券が属する。また、売り主が「山公」ではあるが、建寧元年馬衛將墓券もここに属すると考える。

I b 類型、土地売買の形式を具えるが、やや迷信的な要素を含む形式。購入した土地にもともと埋葬されていた死体はみな被葬者である買い主の奴隷となる旨を具える。この分類には、やはり第一章で釈文と和訳を記した建寧四年孫成墓券のほか、光和元年曹仲成墓券、光和七年樊利家墓券、中平五年房桃枝墓券、□平□年□孟叔墓券が属すると考える。

また、買地券と、いわゆる鎮墓券との中間にあたる性格の形式として、II 類型、土地売買の要素も含みつつ、明らかに地下冥界に対して申告する目的をもって作成された移文の形式。冥界の官吏や「天帝」「黄帝」の文言が見られ、I 類型と比較すると長文の傾向がある。この分類には、第一章で釈文と和訳を記した延熹四年鍾仲游妻墓券のほか、光和二年王当等墓券、光和五年劉公墓券等、漢年次未詳 (No. 27) 墓券、同 (No. 28) 墓券が属する。先に述べたように、中原地域で盛行した鎮墓瓶との類似性が窺える。

また、第二章において述べたように、高倉氏は「沽酒各半」「如律

令」という二つの結語に着目し、これに墓券の形状を併せて分類している。これは刮目すべき分類である。後漢の墓券は結語によって「沽酒各半」「如律令」の二種に明確に分かれるのである。ここで筆者は氏の分類のアイデアに倣い、先の独自の分類にさらに結語及び墓券の形状、また出土地域の項目を付加して、限られた数の資料による考察の限界も顧慮しつつ、後漢墓券の全体像を考えた(表3)。

一見すると、Ⅱ類型の全てが「如律令」の結語を有することが認められる。これは鎮墓瓶と共通した布告文の形式を持つということと結びつく至当の結果であろう。「如律令」という文言は、すでに呉榮曾氏はじめ多くの先学による指摘があるように、漢代の公文書に見える結語であり、鎮墓瓶に用いられているほか、後代の符呪の類に「急急如律令」などと用いられる例が多く見られる。<sup>(33)</sup> 後漢時代、すでに迷信的墓券の結語として用いられていたことと深い関わりを感じさせる。

次いで、Ⅰb類型は光和元

年曹仲成墓券のみ結語が「如天帝律令」であったほかは全てが「沽酒各半」系の結語であった。ちなみにⅡ類型の鐘仲游妻墓券中には「有天帝教、如律令」とあり、記載の地名からこの曹仲成墓券と同じ河南省孟津県出土と推測され、文言の共通性を感じさせる。

表3 結語・形状と出土地域の関係

No.	出土地	分類	結語	材質・形状
1	山西忻州 (伝)	I-a	A	玉・長方形
16	洛陽 (伝)	I-a	A	鉛・筒
18	江蘇揚州出土	I-a	B	磚・七角柱形
5	浙江蕭山県 (伝)	I-a	B	磚・長方形
17	洛陽 (伝)	I-b	A	鉛・筒
20	河南孟津?	I-b	A	鉛・筒
24	洛陽 (伝)	I-b	A	鉛・筒
25	洛陽 (伝)	I-b	A	鉛・筒
26	洛陽 (伝)	I-b	A	鉛・筒
4	河南省孟津 (伝)	Ⅱ	B	鉛・筒
21	河南洛陽出土	Ⅱ	B	鉛・筒
23	河北望都出土	Ⅱ	—	磚・長方形
27	漢年次未詳	Ⅱ	—	磚・鉛
28	漢年次未詳	Ⅱ	B	鉛・筒

Aは「沽酒各半」、Bは「如律令」

また、本類型は河南省に集中している傾向が見られる。また河南省出土の墓券は押し並べて鉛製の筒形であることがわかる。

またⅠa類型を見るに、「如律令」と「沽酒各半」系の結語と、全く二種に分かれている。しかし出土地域を見ると、「如律令」の結語は江蘇省・浙江省と、どちらも江南地域出土の墓券であり、地域的特徴である可能性が高い。このことは、湖北省江陵鳳凰山漢墓等の一連の江南地域における前漢墓出土の、現実の公文書を模倣した簡牘類にしばしば見られる「如律令」に類する文言の使用が想起される。また、江南地域出土の墓券が二点とも磚製であることは、江南地域において、紀年磚など銘文を磚に著わすという習慣があったという事実と関連性が深いと思われる。

以上、後漢時代の墓券について、研究の沿革と問題点について論じ、これまでなされてきた墓券の分類を参考に、新たな分類を試みた。現実の土地売買を模倣し、極めて簡潔な形式を具えるⅠa類型、購入した土地に元来埋葬されていた死体はみな被葬者である買い主の奴隸となる旨を具えるⅠb類型、土地売買の要素も含むものの、地下冥界に対して申告する移文の形式を採るⅡ類型、さらに結語及び墓券の形状、出土地域を加えて考察した。

買地券が本来現実の土地売買文書を模倣した明器であることを勘案すると、Ⅰa類型がもつとも早期の買地券であることは疑いなく事実であろう。次いでⅠb類型が派生し、また鎮墓瓶に記されたものと同様の冥界観が墓券にも取り込まれてⅡ類型が生じたのだらう。そして後漢時代、これらの諸類型はほぼ同時に存在していたと思われる。

吳天穎氏の指摘した「薄土」及び江南地域における前漢墓出土の現実の公文書を模倣した簡牘類との関連の分析も必要になってくるであろうが、これらの問題については、稿を改めて考察したい。

## 〔注〕

- (1) 『癸辛雜識』別集卷下「今人造墓、必用買地券。以梓木為之、朱書云、用錢九萬九千九百九拾九文、買到某地云云。此村巫風俗如此。殊為可笑。」
- (2) 贗作とされている墓券は除く。
- (3) 「毛物」を動物とするは、湯淺幸孫「地券徵存考釋」『中国思想史研究』第四号 湯淺幸孫教授退官記念論集、一九八一年に従う。
- (4) かつて筆者は鎮墓瓶について論じている。拙稿「漢墓出土の鎮墓瓶について―銘文と墓内配置に見える死生観」『鷹陵史学』二九、二〇〇三。「後漢時代の鎮墓瓶における発信者について」『佛教大学大学院紀要』三二、二〇〇四。
- (5) 端方『陶齋藏石記』卷一。
- (6) 『書道全集』第三卷 下中直也、下中彌三郎編 平凡社、一九三一。
- (7) 仁井田陞「漢魏六朝の土地売買文書」『東方学報東京』第八冊、一九三八、同著『中国法制史研究 土地法取引法』、東京大学出版会、一九六〇所収、補訂版一九八〇。
- (8) 前掲論文四〇四頁「今日幸にして存する漢魏六朝の土地売買文書は、玉・鉛・軋・石などに記されていたため、辛くも傳存することができたものである。そのなかには信仰上の土地の土地の支配者を買主とする墓地売買文書がないが、かならずしも常にこのようなものばかりではなく、現実生活における土地売買文書もまたかなり残っていること

は、その内容から知れる。文書の模刻であり文書そのものの遺物でないとの説も発表されているが、私はむしろ反対にいわゆる模刻は少いと解する。」と述べている。下線部において、言葉の表現上矛盾しているが、いずれにせよ断定はしておらず、むしろどちらも存在することを言っていることは間違いない。

- (9) 台静農「記四川江津券地券」『大陸雜誌』第一卷第三期、一九五〇。
- (10) 原田正巳「民俗資料としての墓券―上代中国人の死靈観の一面―」『フイロソフイア』四五、一九六三。
- (11) 原田正巳「墓券文に見られる冥界の神とその祭祀」『東方宗教』三九、一九六七。
- (12) 朱江「四件没有發表過的地券」『文物』一九六四―一二、程欣人「武漢出土的兩塊東吳鉛券積文」『考古』一九六五―十。
- (13) 方介堪「晋朱曼妻薛買地宅券」『文物』一九六五―六。
- (14) 方豪「金門出土宋嘉買地券考釈」『中国歴史学会史学集刊』第三期 一九七一、陳柏泉「江西出土地券綜述」『考古』一九八七―三など。
- (15) 方詩銘「從徐勝買地券論漢代地券的鑑別」『文物』一九七三―五。
- (16) 李寿岡「也談地券的鑑別」『文物』一九七八―七。
- (17) 方詩銘「再論地券的鑑別―答李寿岡先生」『文物』一九七九―八。
- (18) 杉本憲司「漢墓出土の文書について―特に湖北江陵鳳凰山漢墓について―」『檀原考古学研究所論集』第五、吉川弘文館、一九七九。
- (19) 湯淺幸孫「地券徵存考釋」『中国思想史研究』第四号 湯淺幸孫教授退官記念論集、一九八一。
- (20) 吳榮曾「鎮墓文中所見の東漢道巫關係」『文物』一九八一―一。この論考において吳氏が扱った資料は鎮墓瓶のみであるが、鎮墓瓶と「鎮墓券」が非常に近く、共通した文言を用いたりすることは既に述べたとおりであり、吳氏自身、羅振玉『貞松堂集古遺文』中の「漢人家墓往往有鎮墓

文、或書鉛券上、或書陶器上。」という記述を引いて鎮墓文を説明している。

- (21) 「解適」という文言について、原田正巳氏は呉氏の論考を受けて、ただ単にさまざまな咎殃を解除するという意味にとればよいのか、これに死者生前の罪過という意味を付加して考えるべきであるかどうかという点について問題提起をしている。「中国古代死生観散論——「解適」という語のことなど」「東洋の思想と宗教」七、一九九〇年。アンナ・サイデル氏もまた呉氏の論考を受け、「解」という文言が「解除」の意であることを再検討し、後の道教との関わりを論じている。Anna Seidel 「Trace of Han Religion In Funeral Texts Found In Tombs」秋月観映編『道教と宗教文化』平河出版社、一九八七。

- (22) 呉天穎「漢代買地券考」『考古学報』一九八二—。

- (23) 釈文は、表「後漢時代の墓券」を参照のこと。

- (24) 呉氏一九八二前掲論文三〇頁。

- (25) 池田温「中国歴代墓券略考」『アジアの社会と文化Ⅰ』東京大学東洋文化研究所編、一九八二。

- (26) 富谷至「黄泉の国の土地売買——漢魏六朝買地券考——」『大阪大学教養部研究論集』第三六集、一九八七。

- (27) 劉昭瑞「談考古発現の道教解注文」『敦煌研究』一九九一—四、「《太平經》と考古発現の東漢鎮墓文」『世界宗教研究』一九九二—四、「論『黄神越章』——兼談黄巾口号的意義及相關問題」『歴史研究』一九九六—一。

- (28) 饒宗頤主編、劉昭瑞著『補資治通鑑史料長編稿系列 香港敦煌吐魯番研究中心研究叢刊 漢魏石刻文字繫年』、新文豐出版、二〇〇一。

- (29) 高倉洋彰「漢代買地券の検討」『日本民族・文化の生成Ⅰ 永井昌文教授退官記念論文集』六興出版、一九八八。

- (30) 小南一郎「漢代の祖霊觀念」『東方学報』六六、一九九四。

- (31) 曹岳森「買地券研究三題」『四川文物』二〇〇一—。

- (32) 王育成「考古所見道教簡牘考述」『考古学報』二〇〇三—四。

- (33) 坂出祥伸氏は「冥界の道教的性格——「急急如律令」をめぐる——」『東洋史研究』六二—一、二〇〇三において、小南一郎氏や劉昭瑞氏の「天帝」「解注」の理解にのっとり、さらに墓券・鎮墓瓶の「如律令」という文言と道教的な冥界の神々との関連を後漢から南朝にかけて考察している。

# 〔付記〕

脱稿後、鈴木雅隆氏の「鎮墓文の系譜と天師道との関係」『史滴』二五、二〇〇三を手にした。今回は参考にすることができなかったが、今後参考にした。

(こ) ゆうこ

文学研究科東洋史学専攻博士後期課程  
(指導…杉本 憲司 教授)

二〇〇四年十月十五日受理